

日本気象学会 2008年度秋季大会

会期：2008年11月19日（水）～21日（金）

会場：仙台国際センター（仙台市青葉区青葉山）

大会実行委員会担当機関：仙台管区気象台，東北大学大学院理学研究科，（財）日本気象協会東北支局

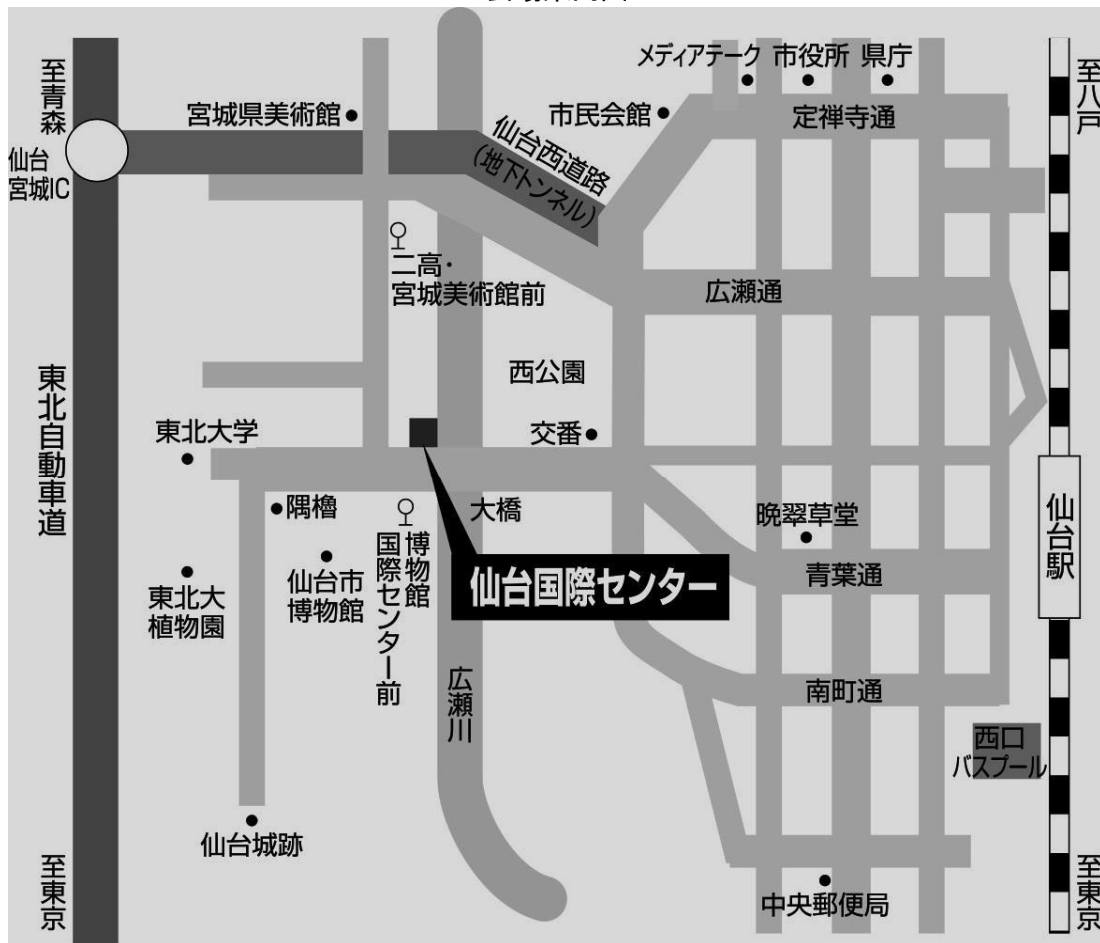
大会委員長：大島 隆（仙台管区気象台）

当日の会場への連絡先：大会実行委員会事務局（仙台国際センター小会議室4）TEL・FAX：022-266-6022

交通の案内

- (1) 仙台空港からJR仙台駅まで
JR：仙台空港アクセス鉄道（料金630円）
バス：リムジンバス（料金700円）
- (2) JR仙台駅から会場（仙台国際センター）まで
バス：乗車／仙台駅前（西口バスプール⑨番乗場）
路線名／「宮教大・青葉台」「宮教大」「宮教大・成田山」「動物公園循環 青葉通・工学部経由」
降車／博物館・国際センター前（徒歩1分）
料金／180円
タクシー：JR仙台駅から約7分（1000円程度）
徒歩：JR仙台駅から約30分（約2km）

会場案内図



大会行事予定

A会場 : 大会議室「橘」 (2階) シンポジウム・各賞授与式会場 : 大会議室「橘」 (2階)
 B会場 : 大会議室「萩」 (2階)
 C会場 : 中会議室「白樺1」 (3階) 受付 : 2階ロビー (2階)
 D会場 : 中会議室「白樺2」 (3階) 大会事務局 : 小会議室4 (2階)
 ポスター会場 : 展示・レセプションホール「桜1」 (2階) 懇親会 : 展示・レセプションホール「桜1」 (2階)

() は講演数, - は座長

		A会場	B会場	C会場	D会場
11月 19日 (水)	09:30～ 12:30	気候システムⅠ (17, A101～A117) －野田 彰－	微量気体・GOSAT (17, B101～B117) －菅原 敏－ －齋藤尚子－	大気境界層 (17, C101～C117) －菅原広史－ －渡邊 明－	気象予報 (9, D101～D109) －斉藤和雄－ 台風 (9, D110～D118) －北畠尚子－
	13:30～ 17:00	スペシャル・セッション 「GAMEからMAHASRI へ～モンスーン研究の 進展と今後～」 (15, A151～A165) －里村雄彦－ －樋口篤志－ －松本 淳－	降水システムⅠ (21, B151～B171) －三隅良平－ －中里真久－	気象教育 (2, C151～C152) －勝俣昌己－ 熱帯大気 (19, C153～C171) －勝俣昌己－ －西 憲敬－	大気力学 (9, D151～D159) －板野稔久－ 中層大気 (12, D160～D171) －河谷芳雄－
	17:00～ 18:00	ポスター・セッション (98, P101～P198)			
11月 20日 (木)	09:15～ 12:00	気候システムⅡ (16, A201～A216) －石原幸司－	エアロゾル (16, B201～B216) －青木一真－	相互作用 (16, C201～C216) －小木雅世－ －佐藤尚毅－	観測手法・放射 (15, D201～D215) －長澤親生－
	13:00～ 13:30	山本正野論文賞・堀内賞・奨励賞授与			
	13:30～ 15:00	山本正野論文賞・堀内賞記念講演			
	15:30～ 17:45	シンポジウム「地域の詳細な気象と気候の再現を目指してーダイナミックダウンスケール技術の高度利用ー」司会：山崎 剛 基調講演：岩崎俊樹，高藪 出，木村富士男，余田成男，中井専人，菅野洋光			
	18:00～ 20:00	懇親会			
11月 21日 (金)	09:15～ 11:30	スペシャル・セッション 「データ同化と予測可能性Ⅰ」 (8, A301～A308) －茂木耕作－	スペシャル・セッション 「ミャンマーサイクロン」 (8, B301～B308) －山田広幸－	スペシャル・セッション 「極端現象の発生頻度と長期変動：統計的アプローチとその課題」 (9, C301～C309) －松本 淳－ －藤部文昭－	スペシャル・セッション 「惑星大気の新しい観測と理論」 (10, D301～D310) －小高正嗣－ －今村 剛－
	11:30～ 12:30	ポスター・セッション (98, P301～P398)			
	13:30～ 17:00	スペシャル・セッション 「データ同化と予測可能性Ⅱ」 (14, A351～A364) －山根省三－ －三好建正－	降水システムⅡ (20, B351～B370) －佐竹晋輔－ －中村晃三－	スペシャル・セッション 「iLEAPS (the Integrated Land Ecosystem-Atmosphere Processes Study)」 (14, C351～C364) －三枝信子－	スペシャル・セッション 「産業と気象Ⅱ ～気象情報・技術の産業への寄与を考える～」 (16, D351～D366) －酒井重典－

発表件数：505件（口頭発表309，ポスター196）

口頭発表の講演・質疑時間：7分と3分

当大会予稿集に掲載された研究発表の文章・図表を複製あるいは翻訳して利用する場合には、日本気象学会の文書による利用許諾を得た上で出所明示して利用しなければなりません。ただし著作者自身による利用の場合は、利用許諾の申請は不要です。

本プログラムの記載内容に関する問い合わせは、〒305-0052茨城県つくば市長峰1-1気象研究所予報研究部内 講演企画委員会 (e-mail: kouenikaku2008a@mri-jma.go.jp) まで。

大会参加費・懇親会費

大会参加費

- 大会参加費は以下の表の通りです。

大会参加費		
種別	前納	当日
講演者A	8,000円	—
講演者B	5,000円	—
聴講者	3,000円	4,000円

- 講演者の種別：
講演者A：研究機関・大学に所属する講演者（ただし、学部生・院生は除く）
講演者B：講演者Aに該当しない講演者
- 講演件数が2件の場合も大会参加費は変わりません（講演件数による加算はありません）。
- シンポジウムのみに参加する場合は、参加費は無料です。

懇親会費

- 懇親会費は以下の表の通りです。

懇親会費		
種別	前納	当日
一般	5,000円	5,500円
学生	3,500円	4,000円

支払方法

- 講演者の参加費の支払い方法は前納のみとなっており、既に受付は締め切られています。
- 懇親会費及び聴講者の参加費を前納する場合は、大会ホームページにて2008年10月7日（火）までにお支払下さい（郵便振替の場合は2008年9月30日（火）まで）。それを過ぎた場合は当日払いとなります。

領収書

- 領収書は参加者本人の名義で、大会当日受付にて名札と一緒に手渡される予定です。
- 名義の変更が必要な場合には再発行が可能ですので、大会当日受付にてお申し出下さい。

その他

- 一旦支払われた参加費・懇親会費は返却いたしません。
- 参加費・懇親会費には会員・非会員の区別はありません。
- 非会員の方も規定の参加費・懇親会費をお支払い頂ければ大会・懇親会に会員と同様に参加することができます。

講演の方法

口頭発表（スペシャル・セッションを含む）

- 一般口頭発表の講演1件あたりの持ち時間は10分（講演7分・質疑3分）です。
- スペシャル・セッションの発表時間については世話人からの指示に従ってください。
- 講演にはPCプロジェクターとOHPが使用できます。
- 止むを得ない事情で使用機器が講演申込時に予め届け出ていた機器と異なる場合は、セッション開始前までに座長と会場係にその旨を申し出て下さい。
- PCプロジェクターを使用する際は予め以下の点をご了承ください。
 - ✓ パソコンは各自で準備して下さい。会場にはプロジェクターおよび接続ケーブルのみを準備します。
 - ✓ セッション開始前の休憩時間などを利用して、必ず接続の確認を行っておいて下さい。また接続が不安な場合は、セッション開始前に会場係に申し出て下さい。
 - ✓ 突然の故障や接続の際のトラブルが発生した場合、座長の判断で発表順の繰り下げなどの対応することがあります。また、場合によってはOHPによる発表に

切り替えさせて頂くこともあります。携帯用メディアによるバックアップファイルの準備やOHPシートの準備など、トラブルへの備えは講演者自身で行って頂くようにお願いします。

ポスター発表

- 講演者はポスターに表題と著者名を明記して下さい。
- ポスター発表の一人当たり使用可能面積は、縦180 cm × 横120 cm程度となっています。
- ポスターの掲示にあたって画鋏・ピンが使用できません。これらは発表者自身で準備してください。
- ポスターの掲示可能時間は以下の通りです。会場の都合上時間厳守でお願いします。
 - ✓ 第1日の発表者は11月19日13:00～18:00
 - ✓ 第3日の発表者は11月21日09:00～13:00
- ポスター会場での機器の使用は、講演申し込み時に申し出ていたもの以外は原則として認められません。

保育施設の紹介について

今大会では、保育施設の斡旋ならびに保育施設利用料の一部補助を行います。利用を希望される方は、10月10日（金）までに下記の担当者までご連絡ください。

連絡先：鈴木 和明（仙台管区气象台技術部予報課）

TEL：022-297-8136、E-mail：kaz_suzuki@met.kishou.go.jp

シンポジウム「地域の詳細な気象と気候の再現を目指して —ダイナミックダウンスケール技術の高度利用—」

日時：大会第2日（11月20日） 15:30～17:45

会場：仙台国際センター 大会議室「橘」（大会A会場）

司会：山崎 剛（東北大学大学院理学研究科）

※シンポジウムの聴講は無料です

趣旨：

高気圧・低気圧の振る舞いや台風進路などの予報は、数値予報の発達とともに、以前に比べて、大変精度が向上しました。しかしながら、頭上の天気は、高気圧・低気圧分布だけで決まっているわけではなく、空間スケールのより小さな、メソと呼ばれる現象にも支配されています。メソ現象は大変複雑で、時として、豪雨や強風など大きな気象災害を引き起こします。地域の詳細な気象・気候情報の作成・利用法の開発が求められています。

地域の詳細な気象・気候を推定する手法として、ダイナミックダウンスケールという技術が注目されています。ダウンスケールとは、環境場の低解像度気象情報が既知の場合に、高解像度の局地気象情報を推定するという意味で使われています。特に、与えられた側面境界の下で実行した領域数値シミュレーションを利用する場合は、ダイナミックダウンスケールと呼ばれています。領域を限れば、ターゲット（現象）に合わせた高解像度シミュレーションを、比較的容易に実施できるようになり、地域の詳細な気象や気候の研究に盛んに利用されるようになりました。身近な現象をリアルに再現するとともに、地上気象要素の予測・診断も容易に行うことが可能となり、応用分野も急速に拡大しています。本シンポジウムでは、日本の地球温暖化予測、アジアモンスーン、アンサンブル気象予測、防災利用、産業利用などについて、ダイナミックダウンスケールに関する様々な話題を提供していただき、今後解決すべき課題と将来の可能性について考えます。

なお、このシンポジウムは、一般の方にも公開いたします。市民の皆さまにも、気象・気候情報の利用について考えていただくと共に、日本気象学会の活動に一層のご理解とご支援をいただければ幸いです。

基調講演

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 1)「ダイナミックダウンスケールの課題と展望」 | 岩崎 俊樹（東北大学） |
| 2)「地域気候モデルによる温暖化予測」 | 高藪 出（気象研究所） |
| 3)「アジアにおける降水帯の再現とメカニズムの考察」 | 木村 富士男（筑波大学） |
| 4)「領域モデルによるアンサンブル予報」 | 余田 成男（京都大学） |
| 5)「雪氷防災情報への利用」 | 中井 専人（防災科学技術研究所雪氷防災研究センター） |
| 6)「農業への利用」 | 菅野 洋光（農研機構東北農業研究センター） |

総合討論

スペシャル・セッションの概要紹介

GAMEからMAHASRIへ～モンスーン研究の進展と今後～

日時：大会第1日（11月19日）13:30～17:00

場所：A会場

趣旨：GAME（GEWEX Asian Monsoon Experiment；GEWEX モンスーンアジア観測計画）集中観測（IOP）が1998年に実施されちょうど10年になる。国際的には、WCRP（世界気候研究計画）のGEWEX（全球エネルギー・水循環観測計画）での後継プロジェクトとなるMAHASRI（Monsoon Asian Hydro-Atmosphere Science Research and Prediction Initiative:モンスーンアジア水文気候研究計画）が立ち上がり、CLIVAR（気候変動及び予測可能性研究計画）とも共同で2008-2009年はAMY（アジアモンスーン観測年）の集中観測を実施している。本スペシャル・セッションでは、GAME-IOP およびその後に行われたプロジェクト研究等で得られた知見を中心として、GAME-IOP後のモンスーン研究の進展を整理し、今後の研究の方向性について議論する。

世話人：里村雄彦（京都大学大学院理学研究科）、松本 淳（首都大学東京大学院都市環境科学研究科 / 海洋研究開

発機構地球環境観測研究センター）、樋口篤志（千葉大学環境リモートセンシング研究センター）

データ同化と予測可能性

日時：大会第3日（11月21日）09:15～11:30、13:30～17:00

場所：A会場

趣旨：近年、初期値が数値予報精度に与える影響について理解が深まり、力学的に一貫した高度なデータ同化手法が実用化されている。データ同化研究は、4次元変分法等を開発し現業化した予報現業機関を中心として進められている。大学等教育研究機関でも、アンサンブル・カルマンフィルタの出現により、比較的簡便に高度なデータ同化手法を用いた研究が可能となってきた。データ同化は、追加の観測に適した領域を推定する感度解析や、観測のインパクトを評価する観測システム実験（OSE）に応用され、観測研究とシミュレーション研究を結びつける手段として注目を集めている。また、初期値の敏感性に関する議論から、予測可能性、アンサンブル予測研究といった分野へと広がりを見せている。このような背景の下、我が国でもデータ同化と予測可能性研究が活発になってきている。本セッシ

ョンでは、この分野の最新の研究成果を集め、討論を行うことを目的とする。

世話人：榎本 剛（海洋研究開発機構地球シミュレータセンター）、三好建正（気象庁予報部数値予報課）、山根省三（同志社大学理工学部）、茂木耕作（海洋研究開発機構地球環境観測研究センター）

ミャンマーサイクロン

日時：大会第3日（11月21日）09:15～11:30

場所：B会場

趣旨：ことし（2008年）5月上旬、サイクロンNargisが、ミャンマーのデルタ地帯に上陸し、甚大な被害をもたらした。これまで北インド洋のサイクロンについては、バングラデシュのサイクロンの被害調査などは行われているものの、ミャンマーに被害をもたらしたサイクロンについては研究があまり行われていない。今回のサイクロンはどのように発生したのか、なぜ急発達したのか、進路が特異だったのはなぜか、あれだけの大きな被害が出たのはなぜか等、多くの解明すべき点がある。本セッションでは、これらの点について調べた研究結果を発表する機会とするとともに、気象学的なアプローチだけでなく、水文学的な見方、海洋学的な見方などについても発表をお願いしたい。さらに、北インド洋でのサイクロンについて調べた結果などについても議論したいと考えている。

世話人：佐藤正樹、高薮 縁（東京大学気候システム研究センター）、中澤哲夫（気象研究所）、林 泰一（京都大学防災研究所）

極端現象の発生頻度と長期変動：統計的アプローチとその課題

日時：大会第3日（11月21日）09:15～11:30

場所：C会場

趣旨：大雨、高温、強風などの極端な現象に対する統計的な知見（極値の再現確率など）は、防災をはじめとして社会の多方面で必要とされており、近年“異常気象”に対する関心が高まるにつれてその重要性が増してきた。しかし、頻度の低い現象を統計的に評価するという手法上の難しさのほか、非定常性（長期変動）の扱いやデータの均質性の問題など、解決すべき課題は多い。本セッションでは、極端現象の頻度や長期変動の実態のほか、統計手法に関する技術的問題や利用者側から見た情報の望ましいあり方など、アプローチや研究のあり方についても議論したい。また、利用するデータの確保やその品質についての問題、近年発展の著しい気候モデルを使った極端現象の評価に関する発表も歓迎する。

世話人：藤部文昭（気象研究所）、松本 淳（首都大学東京大学院都市環境科学研究科 / 海洋研究開発機構地球環境観測研究センター）、沖 大幹（東京大学生産技術研究所）、山崎信雄（気象大学校）

惑星大気の新しい観測と理論

日時：大会第3日（11月21日）09:15～11:30

場所：D会場

趣旨：惑星大気に関する力学的研究は地球大気の気象力学を諸惑星に適用する形で発展してきたが、観測データの絶対的不足のため、これまでに提出された種々の理論の妥当性を観測事実との比較によって検討するという作業は、これまであまりされてこなかった。近年、惑星大気に対する国

内外での関心の高まりから、多くの新しい観測事実が蓄積されつつあり、理論と観測の両面から相互の現状を検討することが喫緊の課題となっている。本セッションでは、惑星大気に関する最近の観測的・理論的研究を対照すると同時に、今後の惑星探査・惑星大気観測の展望もあわせて議論したい。

世話人：高木征弘（東京大学大学院理学系研究科）、今村 剛（宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究本部）

iLEAPS（the Integrated Land Ecosystem-Atmosphere Processes Study）

日時：大会第3日（11月21日）13:30～17:00

場所：C会場

趣旨：地球圏-生物圏国際共同研究計画（IGBP）の第Ⅱ期では、第Ⅰ期における大気や水循環に関するコアプロジェクトを再編する形で、陸域-大気間のインターフェイスの過程を課題とする、統合陸域生態系-大気プロセス研究計画（iLEAPS: the Integrated Land Ecosystem-Atmosphere Processes Study）がコアプロジェクトとして組織された。iLEAPSの目的は、陸域生態系と大気間の物質とエネルギーの移動と変換に関する物理、化学、生物過程の相互作用を解明することにある。気象学会の中でも関連する多くの研究が存在するが、現状では必ずしもそれらの間の連携や情報交換がうまくなされていない。本スペシャル・セッションでは、上記の目的に関連する発表を一堂に会することにより、今後の日本国内での連携を深め、この分野における日本の国際的プレゼンスを高めることにつなげたい。

世話人：近藤裕昭（産業技術総合研究所）、小池 真（東京大学大学院理学系研究科）、近藤 豊（東京大学先端科学技術研究センター）、鈴木力英（海洋研究開発機構地球環境フロンティア研究センター）、林健太郎（農業環境技術研究所）、檜山哲哉（名古屋大学地球水循環研究センター）、松枝秀和（気象研究所）、山崎 剛（東北大学大学院理学研究科）、吉田尚弘（東京工業大学大学院総合理工学研究科）

産業と気象Ⅱ ～気象情報・技術の産業への寄与を考える～

日時：大会第3日（11月21日）13:30～17:00

場所：D会場

趣旨：気象（気候）が産業に及ぼす影響は大きく、気象（気候）の調査・研究成果は、従来から、多くの産業に活用されてきた。しかし、近年、異常な気象（気候）状態が頻発するようになり、地球温暖化問題、環境問題などとも相俟って、社会の対応は複雑化してきている。その一方で、気象（気候）の観測・予測・情報通信技術が大きく進展するとともに新たな知見も得られ、そうした事態への対応策を幅広く提案できる技術基盤も整ってきている。こうした背景の下、このセッションでは、昨年に引き続き、次の観点での発表を募り、産業振興の資を得るとともに実学としての気象研究の課題を涉猟する場としたい。①気象（気候）が産業に深刻な影響を与えた事例の気象学的分析など、②産業現場の気象（気候）ニーズ（気象（気候）の影響と深さ、気象情報・技術の利用目的など）、③気象（気候）の情報・技術等の、利用成功事例・失敗事例など、④提供可能な気象（気候）情報・技術（有効な従来情報・技術、最近提供可能となった情報・技術、近い将来提供可能となる情報・技術）。講演内容は、上記①～④のほか、他の複

合した内容や研究の中間報告でもよいので、多数の発表をお願いしたい。

世話人：岩崎俊樹（東北大学大学院理学研究科）、小田嶋孝一（仙台管区気象台）、菅野洋光（東北農業研究センター）、岩田 修、白石晶二（日本気象予報士会）

研究会のお知らせ

大会期間中とその前後に以下の研究会が予定されています。興味のある方はご自由にご参加下さい。

第31回メソ気象研究会

日時：2008年11月18日（火）（大会前日）13:30～17:30

場所：コラッセふくしま 多目的ホールA（JR福島駅西口複合施設）福島県福島市三河南町1番20号

TEL：024-525-3910 URL：http://www.corasse.jp/

テーマ：「突風」

コンピーナー：渡邊 明（福島大学共生システム理工学類）・楠 研一（気象研究所）

内容：平成18年9月の宮崎県延岡市、11月の北海道佐呂間町など、近年、竜巻等の突風による大きな災害が起きています。それをうけて最近、突風に関する調査や突風の早期探知に関するプロジェクトが実施されています。また気象庁では3月から竜巻注意情報を発表するようになりました。そこで今回のメソ気象研究会では、突風をもたらすような局地風とそれによる災害に焦点を当てました。これまで得られた知見をまとめるとともに、突風防災のため今後どのような技術が期待されるのか、それにより減災はどこまで可能であるのかなどをみんなで議論します。前半では突風現象の事例研究、後半では突風災害の監視・予測手法について最近の取り組みについて講演が行われます。多くの方々のご参加と活発な議論をお願いします。

プログラム【1人20分程度】：司会 楠 研一（気象研）

主催地からの歓迎メッセージと趣旨説明 渡邊 明（福島大）

1. 基調講演

突風現象の理解と防災 新野 宏（東大）

2. 様々な突風現象の研究

竜巻・ダウンバーストの観測 小林文明（防衛大）

高解像度シミュレーションによる強風の時空間変動の解析と突風の診断 竹見哲也（京大）

竜巻の実験的シミュレーション 佐々浩司（高知大）

寒冷前線に伴うガストフロントによる突風 渡邊 明（福島大）

北陸小松空港付近で観測された突風災害について

道本光一郎（防衛大）・宇田英史（航空自衛隊）

2006年台風第13号に伴う延岡竜巻の数値シミュレーション 益子渉（気象研）

3. 防災／減災にむけた最近の取り組み

気象庁の取り組み：竜巻注意情報 気象庁（海老原 智）

鉄道における取り組みⅠ突風探知：

(a) 突風探知プロジェクトの紹介 楠 研一（気象研）

(b) 事例解析 猪上華子（気象研）

鉄道における取り組みⅡ予測：気象レーダの観測値を用いた冬期の寒冷前線に伴う突風の予測について 加藤亘（JR東日本防災研）

道路交通における取り組み：吹雪による視程悪化の予

測実験と観測 佐藤 威（防災科研）

4. 総合討論

世話人：坪木和久（名大地球水循環）、加藤輝之（気象研）、小倉義光（東大海洋研）

連絡先：楠 研一（気象研）

E-mail：kkusunok@mri-jma.go.jp

温暖化影響評価のためのダウンスケーリングに関する研究会

日時：2008年11月18日（火）（大会前日）13:30～19:30

場所：仙台国際センター 小会議室6

テーマ：ダイナミカルダウンスケーリングと統計的ダウンスケーリング

内容：温暖化予測におけるダウンスケーリング研究は、全球大気海洋結合モデルによる気候予測結果と詳細化しつつある影響評価研究の間に橋を架ける研究であり、社会的な関心が増大しつつある研究分野です。これまで、どちらかという個別の全球モデルに直結したダイナミカルダウンスケーリング、あるいは個別ユーザーの目的に特化した統計的ダウンスケーリングとしてそれぞれ独自に研究が進められ、相互交流の機会は小さかったように見受けられます。今回はこのテーマに取り組んでいらっしゃる研究者の皆様から話題提供をいただき、情報交流をはかりたいと考えます。

連絡先：高藪 出（気象研）

E-mail：takayabu@mri-jma.go.jp

CMIP3マルチ気候モデル比較に関する研究会

日時：2008年11月18日（火）（大会前日）13:30～19:30

場所：仙台国際センター 小会議室1

テーマ：大気・海洋現象の再現性のメトリックおよび温暖化予測研究への利用について

内容：全球の気候変化に伴い、大気および海洋の諸現象がいかに変化するかを具体的に把握することは、気候変化が人間社会に及ぼす影響を予測するために重要です。今回の研究会では、IPCC AR4に利用されたCMIP3マルチ気候モデルにおける大気・海洋の諸現象の現在気候再現性を評価する基準、およびその温暖化予測研究への利用方法を議論します。また、特にアジア域気候全体の再現性評価という視点を含め、現象間相互関係について検討します。研究者の皆様から話題提供をいただき、情報交流をはかりたいと考えます。

連絡先：高藪 縁（東大気候システム）

E-mail：yukari@ccsr.u-tokyo.ac.jp

オゾン研究連絡会・極域寒冷域研究連絡会合同研究会

日時：2008年11月19日（水）（大会第一日）18:15～2時間程度

場所：仙台国際センター 大会議室「萩」（大会B会場）

話題：オゾンホール鉛直構造と最近の話題

1. オゾンシンポジウム報告 中根英昭（環境研）
2. オゾンホール鉛直構造と季節変化
 - ・南極昭和基地におけるFTIR観測とオゾン・エアロゾルゾンデ観測 中島英彰（環境研）
 - ・粒跡線解析を利用した南極オゾンホール内オゾン層状構造の研究 富川喜弘（極地研）

今回は、オゾン研究連絡会、及び極域・寒冷域研究連絡会が合同で、オゾンホールを中心に話題提供を行います。オゾンホールは発見から20年以上が経過し、人間活動が地球環境に影響を及ぼした問題として社会的な関心を集めてきました。この現象は大気化学と大気力学の両面的な考察を通して理解され、社会的な対策がとられるまでになりました。一方で、最近になってClOOCの光解離に関連したメカニズムの見直しの議論が持ち上がったたり、オゾンホールの発生・解消時期に現れる細かい層状構造の観測や解析ができるようになってきました。そこで、合同研究連絡会の前半では、2008年6月30日～7月5日に行われた国際オゾンシンポジウムで話題になったテーマについて、概要を報告していただきます。後半では、南極昭和基地でのFTIR及びエアロゾルゾンデによる観測結果と、数値計算を使った大気循環の解析とから、3次元的なオゾン分布・輸送について議論したいと思います。今回の合同開催を、分野の垣根を越えて、多数の研究者による幅広い議論と交流の場を提供する機会にしたいと考えています。

世話人：[オゾン研究連絡会] 笠井康子（NICT）、川上修司（JAXA/EORC）、河本 望（RESTEC）、高島久洋（FRCGC）、永島達也（環境研）、村田 功（東北大院環境科学）
[極域寒冷域研究連絡会] 山崎孝治（北大院地球環境）、阿部彩子（東大気候システム）、猪上 淳（IORGC）、浮田甚郎（新潟大）、齋藤冬樹（FRCGC）、佐藤 薫（東大院理）、高田久美子（FRCGC）、高谷康太郎（FRCGC）、中村 尚（東大院理）、平沢尚彦（極地研）、本田明治（FRCGC）

連絡先：平沢尚彦（極地研）

TEL：03-3962-4862, FAX：03-3962-5704,

E-mail：hira.n@nipr.ac.jp

第5回統合的陸域圏研究連絡会

日時：2008年11月19日（水）（大会第一日）18:15～20:15

場所：仙台国際センター 中会議室「白樺1」（大会C会場）

内容：「統合的陸域圏研究連絡会」においては、陸面を中心とする大気境界層から土壌内に渡る陸域圏を研究の主な対象とし、そこにおける物理的、生物的諸過程の理解に向けた、広い視野に立った研究のための情報交換、陸域圏を対象とした基礎的なメカニズムの理解と、他の圏との広域

的・長期的相互作用システムの解明、直接観測、間接観測、およびモデリングの融合、空間的・時間的スケール間ギャップの問題の解決への方向性の探求、正確な現状の認識と、実質的に意味のある手法の開発に向けた努力、およびそれらのための研究協力関係の構築を目的としています。今回は4名の招待講演者による講演を中心に研究会を開催いたします。

講演者および講演題目：

高田久美子（FRCGC）「産業革命以前(1700～1850年)の耕地化がアジアモンスーンに及ぼした影響」

真野裕三（気象研）・橋本徹・奥山新（気象衛星センター）「気象衛星センターの陸域エアロゾルプロダクトについて」

梅澤 拓（東北大）「大気メタンの同位体観測によるアラスカ域のメタン放出源の推定」

山崎 剛（東北大）「陸面過程モデルを用いた森林・凍土に関する研究」

世話人：馬淵和雄（気象研）、大谷義一（森林総研）、青木輝夫（気象研）、奈佐原（西田）顕郎（筑波大）、伊藤昭彦（環境研）、佐藤 永（FRCGC）、大石龍太（東大気候システム）

代表連絡先：馬淵和雄（気象研）

TEL：029-853-8732, FAX：029-855-7240,

E-mail：kmabuchi@mri-jma.go.jp

大気象サイエンスカフェ「かだっぺや」

日時：2008年11月21日（金）（大会第三日）18:00～20:30

場所：仙台国際センター 中会議室「白樺2」（大会D会場）

副題：「天気を知って家庭や地域をもっと元気に！」

内容：「かだっぺや」とは東北地方の方言で「語り合おう」という意味です。生活と気象、産業と気象とは、切っても切り離せません。気象に携わる者として地域とどう結びついていくのがよいのか。この「大気象サイエンスカフェ」では、前段で、様々なバックグラウンドを持つ気象研究者や気象予報士が、各々の思いを話題として提供します。後段では、前段の話題提供を受けて、会場にご参集の皆様とのやりとりを行い、その中から気象をとおして家庭や地域をもっと元気にするアイデアやヒントが生まれてくることを期待したいと思います。気象研究者は何を研究すればよいのか、気象予報士はどう立ち回ればよいのか。大会最終日の最後のひととき、缶コーヒーやペットボトルを片手に、自由気ままな雰囲気の中でかだっぺや。皆様のお気軽なご参加をお待ちしております（空き缶やペットボトルは、それぞれでお持ち帰りをお願いいたします。）

主催：日本気象予報士会東北支部

世話人：小田嶋孝一（仙台管区気象台）、小川栄造（予報士会東北支部）、関 隆則・白石晶二（予報士会）

連絡先：小川栄造（予報士会東北支部）

TEL・FAX：0223-23-3702

E-mail：eizobach@ta2.so-net.ne.jp

2009年度春季大会の予告

2009年度春季大会は、2009年5月28日（木）～31日（日）につくば国際会議場（エポカルつくば）で開催される予定です。大会告示は「天気」12月号に掲載予定です。なお、春季大会の講演申し込み締め切りは2009年2月頃となる予定です。